

尾内達也詩集『耳の眠り』

世界の深淵を聴きとる詩精神 佐相 憲一

尾内達也さんの詩にずっと注目していた。詩誌「コールサック」の中できらりと光っていた。独特の深い宇宙感覚と哲学性を持つていると感じたのである。「この人の詩が世に広く知られればいいなあ」とずっとひそかに思っていた。

この度、ついにこの「知られざる」（コールサックでは有名）名詩人の第一詩集が世に出たのである。喜びたい。

尾内達也さんの詩世界をひと言で表現するならば、遠くの方へ放散していくものと、ひとところへ集中していくものが、同時に動いて、静かで熱い光がこちらの胸の奥に届く、そんなイメージだ。読者諸氏はいかがであろうか。

「放散」エネルギーと「集中」エネルギーが同時に見られるというこの特長は、一つにはおそらく彼が哲学的な思考力を持ち、シンプルな現象の中に相反する力の作用が働いているという世界の本質をとらえているからであろうし、一つには翻訳活動を通じてヨーロッパなど諸外国の文化に親しむ開放的・国際的な面と、俳句を現代詩に引き継いでいるような研ぎ澄ましそぎ落とす面の双方を追求しているからであろう。多面的なこの広さが彼の詩を独特のものにしている。しかし、選択されるその言葉は難解な言語主義的なものではない。日常の言葉を非日

常の緊張領域まで深める詩の言葉だ。

詩集は四部構成になっている。

I部の「越境」詩群には、現代世界のリアルな現実との対峙がある。パレスチナのガザ地域におけるイスラエル軍の軍事攻撃に（散らばったサンダル）（「ガザ」）、イラクでのアメリカ軍の攻撃に（眠らない眠りへ）殺される住民（「余白」）、アフガニスタンの鉱脈と武力で荒らされた土地の人々のところ（「ラピスラズリ」）。そのような世界の悲しみと怒りと沈黙を我がこととして受けとめたところから、この詩人の言葉は発せられるのだ。それは、詩を書くという行為を、この世界に生きる人間としての責任を自らに問い詰めた上での行為と考えるこの詩人の誠実な姿勢であり、言葉の中に感じられる緊張感がその証であると言えよう。戦禍の被害者の存在の中にこそ「詩」があり、作者がそれを刻印しているというスタンスだ。ここには詩精神の遍在という語り部の伝統に連なる視点がある。

「耳の眠り」「夜への越境」の二篇は詩集の中で最も新しく、詩誌「コールサック」六八号・六七号に掲載された。

「耳の眠り」では世界の雪を感じる耳のありようが描かれる。（沈黙にも音はあるのだ）という、小さなものを素直に受けとる肯定と、（突然 なにもかも／中断してしまふ／心も言葉も置き去りにして）という否定的状況。暗示された（物語）は謎めているが、読みようによっては日本の戦後社会の影も感じられる。そうした（誕生と死を繰り返した果に／黒を着る日である）という認識は、それでも（雪の朝に耳がめぐる）

強靱な希望の力を含んで、現代世界の悲しみに向き合っているのだ。

「夜への越境」は詩人・尾内達也の代表作の一つと呼びたい力作である。（鏡を越境して／ことばの国へ／夜また夜へ／おれの一瞬の回想が／だれかの問題の答えになる／歴史が放電される一瞬は／いつもなにげない）。私はこの見事な詩句に六七号編集時からうなずいてしまった。ここには、宇宙の中の地球人類の歴史の各層をおのれの中に引き受けて、歴史そのものになつて感受するこの詩人の特性がよく表れているだろう。そして、（汝／その門より出でよ／ことばは／完全なる不完全／どこまでも／死は見えない／銀河では気の狂った者こそ／王なのである）。人類の歴史と個人の人生にはいかに苦しみや悲しみが満ちているかを痛感している作者が、怒り爆発のすれすれのようなところでぐっとそれを呑み込んで、ことばの限界からことばの可能性をねじり出すような内面エネルギーで、銀河にすべてを解放しようとする。夢のある、かつ現実的な、力強い展開である。諧謔も光る。（踊るのみ／気が狂えば狂うほど／花にちかくなる／石ころ一つ／夏野へ投げて／深い淵の音を聞く）。これは俳句アヴァンギャルド詩句とでも呼べるかもしれない。余韻を残す沈黙の集中と、状況を主体的に切り拓いていく放散エネルギーの独特な融合。はじめの方に指摘したこの詩人の詩世界の特長が典型的に出ている。世界の歴史や個人の矛盾を抱えたまま、それでも人は生きていくのである。芭蕉への敬愛もうかがわれる銀河スケールのすぐれた詩である。

II部の「時制」詩群では、日本の古典文学や近現代文学の世

界を自らの中に取り込んで、敬愛する俳人や詩人などのユニークな対話や解釈などを織り交ぜて、土地や自然や社会の中でのさまざまな本質を描き出している。その語り口の軽妙な味わいに、詩人のもうひとつの顔がうかがわれて、親しみを覚える。

（葉の花に／風の吹くたび／空ゆれて／谷は／おいらのわっはっは）（晩年）。（おいら誰だったんだろう／誰でもないさ／おいら誰だったんだろう／誰でもあるさ／なあ 鳴海さん／／たまには声を聴かせてくれよ／／天外や夢の中にも秋は来て）（釣り）。（おのが臍の緒どこまでも／たぐりたぐりて一万年／木となる火となるおのがじし／その一瞬の鳥の眼で／そろりそろりと参ろうぞ／来し方を行く末にして／旅一つ／／は は は は）（最後の言葉）。

「暦」という詩は特に深い。社会のその時々のあるこれ染みついた暦をいったん離れて、大自然の中での本来の素朴なおのきや歩みを想起させる。（月のない夜／暦を見てはならない／日も月も書かれていない／生まれたての世界／どこかで／時を書き込む者がいる／夜の川風は／まだ血なまぐさい／歴史の匂いがしない／窓辺で／少女が鳥唄を歌っている／だれかに呼ばれて／突然 歌声が途切れた）。そして、終連で、アイヌの世界が描かれる。（夜の広がりか昼の深さと／等しく釣り合う頃／アイヌの言葉がよみがえる／イランカラプテ／イランカラプテ／きみの中の神に／ほくの中の神に／かつてひとは／雲であり／日であり／風であった）。（イランカラプテ）というのは、アイヌ語で「こんにちは」という意味の言葉である。自然の恵みに日々感謝し、ひともその中であつたアイヌの世界。

それを破壊し、虐待し、差別した和人の世界、日本国家であった。しかし、長年虐げられたアイヌの世界観や暮らし方は、地球環境が破壊され人間関係の荒れた現代世界において、これから生きる考え方の参考となる先駆性をもっているのであった。そのようなことを、理屈ではなく、夢幻的で原初的な詩作品の中のハイライトとして、優しい呼びかけのリズムでさりげなく刻印したこの詩精神は、地球の歴史をふまえた二十一世紀の視点をもっている。批評性が軽快なりズムや抒情性とひとつになっけていて、新鮮な作品だ。

Ⅲ部の「パン」詩群では、短詩の魅力が探求されている。作品群はそれぞれ独立の別個のものであるが、有機的なつながりをもたせてあるので、個々として読みながらも、全体としての存在の物語を人生の親しみをもって共にすることができるのではないだろうか。

「空」には青春のひたむきさと空しさと夢が鮮明だ。全篇引用する。(壁の時計／午前二時／あいつは／青空を夢みる少年だった／失われた星々／失われた人々／あいつは／夢の中でそれに会う／絶望は／深空に似ている)。

続いての詩群が生と死のさまざまな局面を考察していく。

詩集全体の日本語部分最後の詩「夢」は、鮮やかだ。全篇を引用する。(初雪が／沈黙の石の上に／多様性を／一色で染めている／／あなたの手には／血のように赤い薔薇／わたしは驚く／雪の文脈に)。ここには世界のかなしみを含んだ感覚が象徴的に描かれているが、光のニュアンスも感じられる。謎めいているが、詩人の内面映像は世界の夢のようでもある。混乱し

た汚れた世界を認識して、詩人はそこに降る静かな雪を夢見る。そこへ(あなた)という生きた人間の持つ赤い薔薇の花。それは血の流れでもあり、むごたらしいもののニュアンスも背後に含みながらも、生命の情熱や人間関係の新しい物語の予感も象徴された存在である。雪と薔薇の鮮明な対照に(驚く)という生身のこころ。この原初的な感受性、そこからこそ現代人の(夢)は見えるのだろう。

Ⅳ部にはⅢ部の詩群の英語版が詩人自身の手で書かれている。これを読むと、尾内さんは日本語の詩を英訳するのではなく、その逆でもなく、自らの中に生み出された言語前の詩の原形を、日本語版と英語版で別に書くという手法をとっているようだ。だから、英詩の方にはそれにあつた独自のリズムがあり、英語俳句やドイツ語俳句もやっている人ならではの映像的な浮き彫りが光っている。英詩が俳句に近いのも尾内さん独特の作風だ。また、人称などの使用法の違いを利用して、英語版と日本語版で微妙にニュアンスや意味が異なるところなども面白く味わえるものとなっている。

耳の眠りから目覚めて現実世界に耳を澄ます。それはかなしいことかもしれないが希望はある。そんな詩人の声が聴こえたようで、応答の手を振りたくなる詩集だ。強くおすすめしたい。